

黒岩地区

緑と歴史を育む交流の里くろいわ

黒岩地区は北上市黒岩、湯沢、平沢からなり、東と北に北上山地の丘陵をいだし、西は大河の北上川に接し、豊かな大地と里山の恵み、先人が拓いた見事な棚田などの田畑によって、人々の暮らしが多く生き物と共生して営まれています。

北上川と里山がもたらす恵みによって、古くから人々が住み、段丘上には縄文期の土器が発見され、その他の調査によると平安後期黒岩の里には、大寺院が営まれ北上川中流域で重要な寺院「白山寺」と推論されており、当時の作とされる神仏像は県文化財に指定され、江戸時代前期の建築様式をとどめる白山神社本殿も県文化財に指定されている。

黒岩地区の西を流れる大河・北上川には多くの伝説が残り河畔の自転車道路には説明板も設置されている。その他にも黒岩舟場の由来看板や、黒岩出身の江戸相撲の大関・初代二所ノ関に関するものなどが地区内に多くあります。

伝承芸能、民俗芸能活動も盛んに行われており、黒岩太神楽(めでた舞)・沢目大神楽の他、権現舞は地区内に9神楽団体が伝承、黒岩鬼剣舞も新たに加わり、北上市みちのく芸まつりや地区内のイベント初夏の親水公園「お滝さん」水車まつり、秋の湧湧ランドくろいわ芸・農まつり、敬老会、地区内の火防祭等での門付け等で踊られている。

黒岩地区の伝説

蛇石	稚童を呑み込み、法師に呪いをかけられた蛇が北上川を逃れ来たが、ふつと住んでいた五大堂(石鳥谷町)の池のことを思って振り返ると、そのまま石になってしまったと。
おらが淵	おらが淵の底からトンカ、トンカ音がすると、働き者の藤兵衛の米びつはいつもいっぱい。淵の水をくみ出すと石ウスとキネが出てきた。音は消え米びつの不思議も消えた。
七つ石	弁天様が呉竹と小鳥崎の間に橋をかけようと北上川に石を運んだ。あまのじゃくが鶏の鳴き真似をすると朝だと思った弁天様、作業を中止したので、七つの石だけが川に残された。
猿と地藏	地藏と間違われて猿に背負われ川を渡ったおじいさんはたくさんのお賽銭をもらう。隣の欲張りじいさんは「猿のケツツぬらしても、地藏のケツツぬらすな」の猿の歌について…。
坊主石	諸国修行の旅の僧が、北上川の川端で急の病に倒れ石と化してしまった。石のくぼみに米つぶを入れると頭痛が治るといふ伝説も…。自転車道路の工事の際、保存され今もある。
明神淵の河童	お滝さんの流れが北上川に合流する辺りは深い淵になっていて、河童が棲んでいて、夏になると淵から這い出して、サンブチの畑で育てているキュウリを全部食べたという。

おすすめ観光スポット

黒岩白山鎮守の森	県指定文化財の白山神社を取り囲む鎮守の森で、地区民によって整備された散策路では自然や動植物に親しむことができる。
親水公園お滝さん	年1回イベントを開催するほか、水車小屋で挽いたそばでそば打ち体験なども行っており、地域の文化と四季折々の豊かな表情を楽しむことができる。
庚申山公園	昭和56年から地区民によって植栽された桜約300本は、春には満開となり桜を楽しめる。また、市内を一望することもできる。
黒岩まんなか広場	広場内にある「くろいわ産地直売所」では地元農家自慢の新鮮で安心安全な野菜などを販売し、地区内外から買い求めに来られる。

郷土芸能

黒岩太神楽(江戸時代)	建久2年(1191年)南部光行公が南部入りした際に、お土産として踊り伝えられた。昭和53年から、めでた舞を伝承するため黒岩小5年生を対象に、毎年稽古を行い、地区内外の行事に出演している。
沢目太神楽(明治時代)	曾祖父たちが舞っていたものを祖父たちが習い、現代へ教え伝えた。
平沢神楽(文政年間)	破損しているが、文政2年と記された太鼓を保存。現在使用している太鼓は明治20年。戦前まで幕神楽が行われていた。
荒見神楽(明治の中頃)	契約講より発展。御現舞は沢目よりの伝承による。
三坊木神楽(昭和8年)	昭和4年の御滝講から始まり、昭和8年の御滝講で神楽を始める。
五新鴻秋葉講中火伏神楽(昭和8年頃)	昭和4年、集落内で火災があったため、その後地域の火災をなくすために講中で始められたと思われる。
万内神楽(昭和8年)	大正3年2月に万内で腕用ポンプを購入したことを記念して昭和8年より始める。
宿館神楽(不明)	恩義書その他伝わらず。
岩崎長根神楽(1897年頃)	黒岩地区で一番古い神楽といわれ、昔は上がり銭で、カヤ無尽の貸し付け金や水鉄砲(火消し機)など各戸に収めたりした。
呉馬根神楽(大正10年頃)	黒岩寺坂・菅原勘二郎から馬場の及川浅五郎が伝承した。
黒岩鬼剣舞(平成13年)	二子鬼剣舞より指導を受け創立。平成23年に「三館鬼剣舞」から「黒岩鬼剣舞」へ名称が変わり、二子流として継承を認められた。